

第4回大野市都市マスタープラン改訂委員会の会議結果の概要

日時 令和4年2月24日(木)
午後3時00分～
場所 Web会議
(結とびあ 203号室)

1 開会

2 協議事項

- ・地区別意見交換会における主な意見について
- ・地域別構想－地域づくりの方針－(案)について
- ・実現化方策(案)について

} 資料に基づき説明。

【委員のみなさんの主な意見】

- 本日の資料には市が進めたい方向性がまとめられていると感じた。
- 地区別の意見交換会の意見だけで計画づくりをするのではなく、本当に大野に必要な取り組みは何か、十分に考える必要がある。
- 根底として大事な基本的な考え方を掲げる必要がある。大野市にとってそれは、結の心。ずっと大野市の目玉として打ち出してきた。人の繋がりが重要である。方向性としては人の繋がり、支え合いに的を絞るべきではないだろうか。
- 担い手という言葉がたくさん出てくる。便利な言葉だが、方向性が分からない言葉でもある。地域生活拠点の形成を、人口流入に結び付けるためには、集落の担い手なのか、産業の担い手なのか、地域の担い手なのか、明確にすべきではないだろうか。
- 大野に帰ってくるのは、どんな魅力があるのだろうか。そういった情報を発信する機能がない、明確にされていないと感じる。
- 今後、地区そのものの維持ができないのではないだろうか。将来の地区別の人口推移を政策に反映すると良いと思う。
- 市内の宅地整備は、郊外部が主体となっており、中心部では宅地供給が進まない。これは下水道の整備が遅れているのも一因である。民間に期待している面もあるだろうが、行政主体で進めるべき事業もある。
- まちなかへと誘導する補助メニューはあるが、活用しにくいと感じる。まちなかには、耐震改修に膨大な費用を要するような住宅しか残っていない。また、若い人がわざわざ費用をかけてそういった地域に入っていくだろうか。心理的な理由もある。

- 「結」に関する話で、全体を通じて見せ方があるのでないだろうか。実現化方策には市民の役割が記載してある。市民と行政の二項対立の図式ではつまらない。NPOなど行政ではない主体が間に入って結び付けることが考えられる。大野市では公民館活動の活性化を当てはめると良いのでないだろうか。この繋がりをもっと少し上手に表現できないだろうか。
- 人が動くネットワークだけでなくICTでも結び付く。ネットワークと結を繋げてもっと少し上手に表現できると新鮮味が出てくる。新機軸となる。
- 重点的に取り組む施策・事業と進捗評価のチェックシートがある。このようなシートは計画内容を着実に実現するためには必要である。
- 市街地ならではの流域治水の取り組みとして、雨水貯留や土地利用に関する記述されてはどうだろうか。
- 全体としては文字が多い印象を受ける。空いているスペースなどを活用して、文章で引用しているデータを掲載してはどうだろうか。
- 真名川ダムのフラッシュ放流などで地下水涵養量の確保と書いてあるが、フラッシュ放流は時間が短いので地下水涵養量の確保にはほとんど寄与しない。どちらかという環境が維持される効果。地下水涵養量については、恒常流量の確保を水利権者と交渉するなどの記載を検討いただきたい。
- 世帯人員が2020年の2.88人/世帯のままで推移することになっているが、「越前おおの空家等対策計画」では、将来の世帯人員が2を切っている。市の計画として整合性を図る必要があるのではないだろうか。

3 その他

4 閉会